

小宮豊隆

『行人』の材料

『行人』

の材料

『行人』に用いられた材料のうちで、私の知っているだけを此所に書いて置きたいと思う。――

『友達』の第八から第九へかけて、二郎が岡田夫婦から案内をされて、浜寺のある料理屋で、佐野に会う所が書いてある。長谷川如是閑の『犬・猫・人間』によると、漱石を浜寺のこの料理屋へ連れて行ったのは、如是閑である。明治四十二年十月十五日の漱石の日記には、「昨夜九時三十分広島発寝台にて寝る。夜明方神戸着。大坂

にて下車直ちに中の島のホテルに赴く。顔を洗い食堂に下る。ホテルの設備は大和ホテルに遠く及ばず。車を駆りて朝日社を訪う。素川置手紙をして東京にあり。天囚は鉄砲打に出で、社長は御影の別荘なり。天下茶屋迄車を飛ばして遊園地の長谷川如是閑を訪う。遊園地の閑静にて家々皆清楚なり。秋光澄徹頗る快意。如是閑遠藤と
いう高等下宿を去って近所に家を構う。去って尋ぬるに不在待つ少らくにして帰る。二階で話をする。好い心地也。鳥居素川の留守宅で妻君に逢う。如是閑浜寺へ行こうという。行く。大きな松の浜があつて、一力の支店と

云う馬鹿に大きな家がある。そこで飯を食う。マヅイ者を食わせる。其代り色々出して三円何某という安い勘定なり。電車で帰る。難波の停車場から車を飛ばして大坂ホテルに入るともう六時であつた。……」と、書いてある。漱石は『満韓ところどころ』の旅の歸りに、大阪に寄つたのである。「夏目君は無論浜寺は始てだが、案内のつもり私も始めてだ。二人とも朝飯を食つた切りなのだから、好い加減腹が減つて、始めての浜寺も碌々歩き廻ることはしないで、行き当りばつたりに大きな門を入つて、大きい玄関を上つて、トンネルのような廊下を

通つて、宿屋の一間のような二階座敷に通された。君は廊下に出て、何んだか変な所を通つて来たと思つたらトンネルになつてゐるのだと、余程嬉しい所でも通つて来たような風だつた。」と、如是閑は当時の事を追想してゐる。それから如是閑は、其所のうちの料理が「甚だ粗末だつた」事を言い、それにも拘わらず漱石が「出るものは必ず食べ」るので、丁度「修善寺で始めて今の病気を起し、辛うじて危険から脱れて間もない」時分の事（是は如是閑の思い違いで、漱石が修善寺で倒れたのは、この翌年、明治四十三年八月の事である。もつとも漱石は

満韓旅行に出かける前に、一度ひどく胃カタルでやられていた。旅行中も方々で胃痛に悩んだ。そういう事に
関する知識を、当時恐らく如是閑は持っていたのである
う）ではあり、そんなに食ってはいけなйдらうという
ので、「段々猛烈に」「干渉」し出したが、漱石は「黙
ってクスクス笑いながら決して箸を休めな」かった事を
言い、最後に、「其うちに向うの広間の二階の廊下に、
若い商家の小僧のような身装の男が来て、手摺につかま
って二三度身体を前にのめらしたと思うと猛烈に嘔吐を
初めた。すると同じような装をした年上らしい若者がよ

ろめきながら出て来て、吐いている男の背を撫でてやる。夏目君は此方の座敷からそれを見て、「見給え、アレで介抱しているつもりなんだぜ」といって、頻りに「面白いナア」「面白いナア」と繰返した。」と言っている。是がすべて殆んどそのまま『友達』の中に使われているのである。

『友達』の第十二以下に出て来る、三澤が入院していたという病院は、大阪市東区今橋三丁目の湯川胃腸病院である。明治四十四年八月、漱石は大阪朝日新聞から頼まれて、明石・和歌山・堺・大阪と講演してあるいたが、

八月十六日、工合の悪いのを押して、大阪で講演をすませたあと、「宿屋で寝ていると何も食んのに嘔吐を催うしてとうとう胃をただらして夫から血が出ましたので驚ろいて湯川胃腸病院へ這入っ」(明治四十四年十月十三日森成麟造宛)た。三澤や二郎の病院での見聞は、大抵この時の漱石の病院での見聞である。例えば漱石は明治四十四年九月八日、イギリス・ドイツの留学から帰って来た寺田寅彦に宛てて。「病院の三階に寝ている。窓から大坂城の櫓が見える。色々な西洋館が見える。夫から山が見える。大閣の居をトした所丈ある。毎日粥を食う。

おかずは豆腐と麩丈で甚だ心細い。今日のひる刺身を四切食った。早く東京へ帰りたい。国華の画を繰返し繰返し見ている。無事御帰京結構」と書き、終りに「蝙蝠の宵々毎や薄き粥」という句を添えているが、同時に漱石は九月十四日、東京に帰って来てから、松根豊次郎に宛てて、蝙蝠の句とともに「灯を消せば涼しき星や窓に入る」という句を書き、そのあとに「右病院にて」と注記しているが、『友達』の第二十には、「窓は三つ共明け放ってあった。室が三階で前に目を遮へやぎるものがないから、空は近くに見えた。其中に燦めく星も遠慮なく光を

増して来た。三澤は団扇を使いながら、「蝙蝠が飛んでやしないか」と云った。看護婦の白い服が窓の傍迄動いて行って、其胴から上が一寸窓枠の外へ出た。」というような、俳句そのままの病院の描写さえあるのである。

——漱石の入院していた時に、たしか何所かの芸者が入院していたように思う。然し是はどうもしかとした所は思い出せない。看護婦が「運勢早見なんとかいう」のを持っていたのも、この時だったような気がするけれども、是もなんだかあやふやである。

『兄』の第二に、二郎の母だの兄夫婦だのの泊った宿

屋が、「手摺の所へ出て、鼻の先にある高い塗塀を鬱陶しそうに眺めていた母は、「宜い室へやだが少し陰気だね。二郎お前のお室へやも斯んなかい」と聞いた。自分は母のいる傍へ行つて、下を見た。下には張物板の様な細長い庭に、細い竹が疎に生えて錆びた鉄燈籠かなが石の上に置いてあつた。其石も竹も打水で皆しつとり濡れていた。」と描き出される。是はなんとなく私に、漱石が湯川病院に入院する前に泊っていた、当時朝日新聞の客はたいいてい其所につれて行く事になつていたらしい、紫雲楼を思い浮べさせるものを持っている。もつとも大阪の宿屋は、

みんなこんな感じを持っているのかも知れない。然し少くとも紫雲楼の部屋のあるものは、此所に書かれたとそっくり同じ感じを持っているのである。

二郎と母と兄夫婦とは、大阪から和歌山、和歌山から和歌の浦へと、見物に出かける。出発の前夜、岡田が宿屋に訪ねて来て酒が出る所（『兄』第九）で、二郎が「自分には彼がもと書生であった頃、ある正月の宵何処かで振舞酒を浴びて帰って来て、父の前へ長さ三寸ばかりの赤い蟹の足を置きながら平伏して、謹んで北海の珍味を献上しますと云ったら、父は「何だそんな朱塗りの文鎮見

たいなもの。要らないから早く其方そつちへ持つて行け」と怒った昔を思い出」す一節がある。この蟹（無論足だけではない）を漱石の所へ送つて寄越したのは、越後の高田にいる森成麟造である。大正二年一月十二日漱石は森成麟造に宛てて、「大分長い御手紙が参りましたかにかの御自慢には恐入りました。「行人」のなかにかにかの珍味たる事を一寸書きました五六日うちに出て来ますから御覧下さい。尤もかにかのあなたを悪くいう積はありません。ただの滑稽の御慰に過ぎませんからどうぞ其積で御笑い下さいましおこつちやいやですよ。」と書いている。漱

石は恐らく、あの見事な越後の蟹の、茄でて真つ赤になつた脚を見て、すぐ朱塗の文鎮を連想し、それから急に『行人』の中に、それを使って見る気になつたものだらうと思う。然もこの手紙のお蔭で我々は、漱石がこの『兄』の第九を凡そいつごろ書いたかという事を、推定する事が出来るのである。

大阪を立つた二郎と母と兄夫婦とは、和歌山を素通りして、電車で、ひとまず和歌の浦に落つく。「抜目のない岡田はかねてから注意して土地で一流の宿屋へ室へやの注文をしたのだが、生憎避暑の客が込み合つて、眺めの好

い座敷が塞がっているとかで、自分達は直に俣を命じて浜手の角を曲った。そうして海を真前まんまえに控えた高い三階の上層の一室に入った。」と『兄』の第十一に書いてある。漱石が講演旅行をしてあるいた、明治四十四年八月十四日の日記に、漱石は「九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。和歌山からすぐ電車で和歌の浦に着。あしべやの別荘には菊池総長がいるので、望海楼というのにとまる。」と書いている。それにすぐ引き続いて、漱石はまた、「晩がた裏のエレベーターに上る。東洋第一海拔二百尺とある。岩山のいただきに茶店あり猿が二

匹いる。キリという宿の仲居が一所にくる。裏へ下り玉津島明神の傍から電車に乗って紀三井寺に参詣。牧氏と余は石段に降参す、薄暮の景色を見る。晩に白い蚊帳を釣り明け放して寝る夫でも寝苦しい。朝起／涼しさや蚊帳の中より和歌の浦」と書いている。然も「白い蚊帳を釣り明け放して寝る」事（『兄』第十五）も、それでもなお「寝苦しい」一夜を過ごす事（同上）も、「東洋第一海拔二百尺」のエレベーターに乗る事（第十六及第二十三）も、「岩山のいただきに茶店」があつて、其所に猿が飼つてある（但し『行人』では猿は「二匹」ではな

く「一匹」である）事（第十六及第二十三）も、宿の女中が一緒について来る事（第二十三）も、紀三井寺に参詣して「石段に降参す」る事（第二十二及第二十三）も、紀三井寺から「薄暮の景色」を眺める事（第二十三）も、すべて『行人』の中に、適宜に利用されているのである。

『兄』の第十七から第二十一までの間には、一郎が二郎に、お直の貞操を試してくれという事を、頼もうとして頼みかねる所が、描き出される。その場所は「権現様」の境内である。その「権現様」に漱石が参詣したのは、漱石の紀三井寺に参詣した翌日、即ち八月十五日の事で

あつた。『行人』では一郎と二郎とは、まずエレベーターで岩の上へ上がり、茶店で「此処いらで静な話をするに都合の好い場所はないか」と訊いたあとで、「権現様」の境内へ行く事になっているのである。然し一郎は「権現様」へ来ても、なおぐずぐずしている。そのうち「遊覧人めいた男女が三四人」上がって来たので、一郎は到頭その話を一時断念する。

「東洋第一海拔二百尺」のエレベーターは、『行人』では二度使われる。二度目は「兄」の第二十三で、二郎が其所へ母と嫂とを案内して来るのである。其所には「今

度は猿に馴染のある宿の女中が一所に随いて来たので、猿を抱いたり鳴かしたり前の日よりは大分賑やかだった。」と書かれている。是が恐らく漱石の「きりという宿の仲居が一所にくる。」と書いている時の、ほんとの光景だったのだらうと思う。——同じように『行人』では、紀三井寺も二度利用される。是はエレベーターの場合とは反対に、母と嫂とだけが先に見物に行つて、母がその「石段に降参」し、あとで一郎と二郎とが、その昨日「母の見た丈で恐れたという高い石段を一直線に上つて行く事になっている。そうして其所で二郎は兄から、

お直を試してくれ（第二十四）と頼まれるのである。

勿論二郎はそんな馬鹿馬鹿しい事に同意する筈がなかった。然し一郎の態度が余りに真剣で、一郎の頼み方が余りに執拗なので、二郎は到頭、嫂を和歌山まで連れ出し、其所で嫂の了簡をよく聴いて見ようというような事で、兄と妥協せざるを得なくなった。翌日二郎は嫂を連れて、和歌山見物に出かける。然も彼等は其所で暴風雨に遭い、和歌の浦へ帰って来る事が出来ず、不得已二人で和歌山の宿に一泊する事になるのである。この事は『兄』の第二十六から第三十九へかけて描き出される。

然るに漱石の明治四十四年八月十五日の日記には、「(ママ)早
車で新和歌の浦に行く長者議員某氏の招く所という。ト
ンネル二つ。運動場というのは砲台の出来損の如し。帰
りに権現様に上る。橋の所に乞食が二人いる。石段は一
直線で三にしきる。夫から片男波を見る。稀らしく大き
な波が堤を越えてくる。電車で和歌山へ行く途中から降
る。県会議事堂は蒸し熱い事夥し。宴会を開くというか
ら固辞しても聞かず、已を得ず風月というのに赴き離れ
で待っている。宴開くる頃から風雨となる。隣席の綿ネ
ル商望海楼は危険だという。芸妓の踊り和歌山雲右衛門

の話を書いて外へ出ると吹降りである。西岡君は三度も電話をかけて大丈夫かと聞いたら大丈夫と云う。牧君にどうしましよかと云うと牧君は夏目さんどうしましよと云う。北尾君がこちらが宜しいでしょうと云う。後醍院君は是非和歌の浦迄行くと主張する。余等三人はあとの西岡、後醍院、^(ママ)早記の○○君と和歌の浦に向う。余等は富士屋というのに入る。電燈が消える。ランプを^(ママ)着ける。其ランプが又消える。惨憺たる所へ和歌の浦の連中が徒歩で引き返す、車で紀伊毎日の所迄行って電車を待っているると電車は来るには来るが向へ行くのは何とかの

松原迄で其先は松が倒れて行けないという。何時「迄」待っても埒が明かないので帰って来たという。西岡君は今望海楼が今夜中持つか持たぬかが疑問だという。是は電話をかけても通じないからだという。所が富士屋から電話をかければ望海楼へよく通じる。風雨鳴動のうちに愈十六日となる」とあり、翌八月十六日の日記には、「今朝十時の汽車で大阪へ帰らなければならぬ、西岡君は早朝荷物を和歌の浦迄取に行く。つな引でなければ行けぬといふので二人の車夫を雇う（後で壺円八十銭平生の三倍とられる。）帰って、向うは何でもない、三階の客

は皆よく寝たという。」とある所をもつて見ると、『行人』の和歌山の暴風雨の一夜は、漱石自身躬ら経験した事を巧みにモンタージュしたものに外ならなかつたという事が、分かる。和歌の浦が水に浸かるような事があつても、「高々水の中で家がぐるぐる回る位なもので、海迄持って行かれる心配は先ずあるまい」（第三十三）という下女の言葉なぞ、恐らく当時の会話の写生だったのに違いない。

『帰ってから』に用いられている材料に就いては、私は殆んど知る所がない。ただ第三十四で、芳江がお貞さ

んの信玄袋をひっぱり出して来て、二郎にお貞さんの指環だの櫛だの笄だのを見せ、「是卵甲よ。本当の鼈甲じやないんだって。本当の鼈甲は高過ぎるから御已めにしただんですって」といったり、「是一番安いだよ。四方張よか安いだよ。玉子の白味で貼り付けるんだから」といったり、いろいろ生意気をいう所が、或は写生かも知れないし、或は漱石が夫人から聴いた事を、此所に芳江と二郎との会話の形に翻訳したのかも知れないと思うのみである。明治四十四年五月二十五日の日記に、漱石は、自分の所で世話をしていた、西村濤蔭の妹の結婚に関し

て、「荷物は今夜出す筈である。櫛に中ざしは御房さんと同じ卵甲だけれども大変安い、兼安で買ったのは十円積であったが、今度のは三円五十銭である、そうして見た所は同じである。平打の後ろざしは金巻絵に青貝の蝶を出したものであった。」と書いている。そうして此所のお房さんが、『行人』のお貞さんに一番似た感じを持っているように、私は思っているのである。もっともそう思うのは、私だけかも知れない。

『塵勞』の第八で、二郎が父に連れられて上野の表慶館を見に行く。彼等は其所で、利休の手紙を見たり、王

義之の書を見たり、応挙の絵を見たり、その他のんこうだの柿右衛門だのを見た上で外に出て、精養軒の前を通ると、精養軒は結婚披露の宴会があるので、「五色の旗で隙間なく飾られた綱を、何時の間にか縦横に渡して、絹シルクハット帽の客を華やかに迎えてい」る。是は明治四十四年五月以降の『断片』の一の終りに、「⊗結婚——表慶館、上野精養——自働車、馬車、／白石の詩、沢庵和尚、／王、賀の書、／明画、六祖の画、／呉州、なんこうの茶碗／柿右衛門、仁清／乾山、」とあるあの覚え書きが、此所で活かされたものだろうと思う。

同じ『断片』の中に、「⊗子供ノ死 freethinker /
superstitious ニナル」と書いたのがある。是は漱石がそ
ういう事を小説の材料にする積で此所に書いたものか、
それとも自分がそういう気持になった事実を後日の為に
此所に書きつけたものかは分からないが、その五女雛子
を失って以来、superstitious とは言えないまでも、少く
とも不思議な事、神秘的な事に対する漱石の神経が鋭敏
になり、そういう方面の著書を読む事に、深切な興味を
持ち出した事は、事実であった。『塵劳』第十一で、お
重が二郎に、一郎の様子がこのごろ少し変だと言い、一

郎がテレパシーか何かを真面目に研究しているらしい話を
をする所がある。第十五ではHさんが二郎に、一郎が近
ごろ死というものに就いて頭を悩まし、「英吉利や亜米
利加で流行^{はや}る死後の研究という題目に興味を有^もって、大
分其方面を調べたそうで」、「メーターリンクの論文も
読んで見たが、矢張り普通のスピリチュアリズムと同じ
様に詰らんものだ」と嘆息した」という話をする。漱石は、
一郎の心持が何所からどう動いて行ったかを具体的に描
き出すために、自分の修善寺大患以来の、特に自分の子
供の死以来の、スピリチュアリズムに対する自分の心の

動きを、此所に箝め込んだものではないかと思われる。メーテルリンクの論文というのは、おそらく千九百十三年（大正二年）二月発行の「Die neue Rundschau」に載った「Ueber das Leben nach dem Tode」である。漱石はこの雑誌の表紙に刷り込んだ「メーテルリンク、死後の生に就い」の下にアンダラインして、「英米ニ於ケル Spiritualism ノ紹介ノ様ナノナリ」と書いている。同じ雑誌の同じ年の八月号には、Aldert Haas の「Pariser Bohemezeitschriften」という、そうして「千八百九十六年の思い出」という小見出しをつけた、随筆が

載っている。『塵勞』第三十八のマラルメの話は、此所から出たものである。Hさんの手紙には、「東京を立つ前に、取りつけの外国雑誌の封を切つて、一寸眼を通したら、其うちにこの詩人の逸話があつたのを、面白いと思つて覚えていたので、私はついそれを挙げて、兄さんの反省を促」そうとしたのだと書いてある。ただ此所でハースの書いているマラルメと、Hさんの話したマラルメと、少し違う所がある。Hさんは、マラルメの所の面会日に「如何に多くの人が押し懸けても、彼の坐るべき場所は必ず暖炉の傍で、彼の腰を卸すのは必ず一箇の揺ゆり

椅いすと極すっていました。」と言っているが、この揺椅子はマラルメの椅子ときまっていたには違いないが、実はマラルメは決してそれに掛けた事がなかったのだそうである。マラルメはいつでもその椅子の傍に立って、パイプを啣くはえながら、それからそれへと一人で話し続けていたのだという。それだから自然、シモンズだか誰だかの珍客も、空いているその椅子に、マラルメの傍に掛ける気になったのだらうと思う。——是はHさんの思い違いである。もっともHさんは、そんな細かな事を書くのが面倒だったので、其所はいい加減ぼかしてしまったのかも

知れない。

『塵勞』第三十九から第四十へかけて、Hさんが一郎にする、モハメツド山を呼ぶという話は、既に明治三十一年の『不言之言』の中で、漱石によって書かれている。

Hさんは、「私がまだ学校に居た時分、モハメツドに就いて伝えられた下のような物語を、何かの書物で読んだ事があります。」と言っているが、『不言之言』の「糸瓜先生」は、ベーコンの論文の中にあつた筈であるが、話の「真偽の程覚束なし。」と言っている。恐らく漱石はそれを「学校に居た時分」に読んだものであろう。然

もHさんによれば、Hさんの先輩でその話を聴いた一人が、みんなが笑うにも拘わらず、「ああ結構な話だ。宗教の本義は其処にある。それで尽している」と言ったとある。その「先輩」というのも亦、実は漱石自身だったのに違いないのである。

『塵努』第二十九のHさんの手紙には、「我々は二三日前から此紅が谷の奥に来て、疲れた身体を谷と谷の間に放り出しました。」と書いてある。そうしてHさんと一郎とは、暫くこの紅ヶ谷の別荘に滞在する。是は漱石が、明治四十五年七月二十一日から借りて、家族の者を

避暑にやっていた、紅ヶ谷の貸別荘が、材料になつてい
るようである。漱石は日記に、「〇二十一日 小供を鎌
倉へ遣る。汽車先に行つて菅の家に入る。二階から海を
見る。涼し。主人と書を論ず。何紹堂の書を見る。午後
小供のいる所へ行く。材木座紅ヶ谷(ママ)という。思ったより
汚なき家也。夏二月にて四十円の家なれば尤もなり 庭
に面して畠あり、畠の先に山あり大きな松を寝ながら見
る。其所は甚だ可。ただ家の建方に至つては如何とも賞
めがたし。東京の新開地の尤も下等な借屋の如し。」と
書いている。また漱石は、「〇八月二日 鎌倉に行き二

日三日とまって四日の夜帰る。」と書き、その終りに、
 「○松の枝に御櫃が干してある。蟹が松の下を這う。／
 まさきの^(ママ)桓。ひかんの黄な花（婆さんが西洋の芭蕉と
 いう）桔梗。百合。月見草。唐茄子。ササギ。玉蜀黍。
 芋。茄子。仁参（丸い仁参）。青いトマト。／珊瑚樹の
 垣。珊瑚樹の花。遠くから望むと綺麗なり。／光明寺の
 裏の松山の松が軒を圧して見える。」と書いている。然
 もHさんの手紙には、「別荘という大変人間が好いよ
 うですが、其実は甚だ見苦しい手狭なもので、構えから
 いうと、丁度東京の場末にある四五十円の安官吏の住居

です。然し田舎丈に邸内の地面には多少の余裕がありません。庭だか菜園だか分らないものが、軒から爪下りに向うの垣根迄続いています。其の垣には珊瑚樹の実が一面に結^なっていて、葉越に隣の屋根が四半分程見えます。／＼同じ軒の下から谷を隔てて向うの山も手に取るように見えます。此山全体がある伯爵の別荘地で、時には浴衣の色が樹の間から見えたり、女の声が崖の上で響いたりします。其崖の頂には高い松が空を突くように聳えています。我々は低い軒の下から朝夕此松を見上るのを、高尚な課業のように心得て暮しています。」とある。この小

さな別荘にHさんは一郎と一緒に、二人きりで、三度の食事は近所の宿屋から運ばせて、暢気に、長い間逗留するのである。そうして一郎は、「谷一つ隔てて向うの崖の高い松」を見上げて、「好いな」と言ったり（第四十七）、「勝手口の井戸の傍に」植えてあるトマトを、朝、顔を洗う序にもいで食って見たり（同上）、「薄の根に」這っていたり「薄の葉を渡」ったりする「親指の爪位の大きさ」の蟹に見惚れたり（同上）、「細い道を通って、一旦街道へ出て、また夫を横切」って、「約三丁」ばかり隔っている海辺をあるいたり（第四十九）しつつ、自

分の沸きたぎった脳漿が、次第に沈静して来るのを覚えるのである。

最後に、『塵勞』第十七から第二十へかけて、二郎が三澤から誘われて、宮内省の雅楽演奏を拝観に赴く所が書かれている。是は明治四十四年六月三日、当時式部官であった松根豊次郎の斡旋で、漱石自身拝観に出かけた時の印象が、具さに利用されているのである。是は漱石のその日の日記を見れば分かる。漱石は此所で、自分が休憩室で小耳に挟んだ、岩倉掌典長と九條公爵と萬里小路子爵との、東儀鉄笛の噂までも利用して、なんとなく

雅楽の拝観らしい気分を出そうとしているのである。

明治四十四年の『断片』の二には、恐らく漱石が『彼岸過迄』を書き出す前、出来れば其所で使いたいと思つたらしい材料が、箇条書きのようにして、書き並べられる。「○鎌倉、蛸取、小坪／○楽楽／○婚礼 太神宮、五軒町、西片町／○明石、和歌山／○大阪病院／○痔 括約筋／○能楽堂 左陣 松風／○有楽座名人会 呂昇 堀川／○帝国劇場、ノラ／○子供ノ死。／葬、火葬場、骨拾／○関口と早稲田の変りよう。／○小川町停留所」というのが、それである。このうち「○鎌倉、蛸取、

小坪」と「○明石、和歌山」の「明石」と「○子供ノ死」と「○小川町停留所」とは、『彼岸過迄』の中に用いられた。残りの「○楽楽」と「○明石、和歌山」の「和歌山」と「○大阪病院」と「○有楽座名人会 呂昇 堀川」のうちの「有楽座名人会」と（是は名前だけにしか過ぎないが）は、『行人』の中に用いられる。雅楽の印象、和歌山での暴風雨の経験、大阪の病院の三階の生活、そういう漱石にとって、使わずに置くには余りに惜しい材料を漱石は、一度『彼岸過迄』で使おうとして使えなかった為に、次の機会の来るまで、じっと抱いていたもの

に相違ないのである。「○痔 括約筋」というのは、翌大正元年九月、漱石が神田の病院で受けた痔瘻の手術と一緒にして、大正五年の『明暗』の中に用いられる。是を漱石は。四年間抱いていた詳である。

(一一・一二・二二)

日本文学電子図書館

『行人』の材料

著 者：小宮豊隆

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館